

# サルトルのモーリヤック批判

森井正史

## 序

ジャン-ポール・サルトルが<sup>①</sup>、1939年2月、NRF誌 (*la Nouvelle Revue Française*) に『フランソワ・モーリヤック氏と自由』 *M. François Mauriac et la liberté*<sup>(1)</sup> と題する論文を発表し、主として『夜の終り』 *La Fin de la nuit*<sup>(2)</sup> (1935年) をとりあげ、主人公テレーズに自由というものがあるのかどうかを問い、作者のモーリヤックがテレーズの運命を断定してしまっていて彼女には自由が与えられていない、そして、それはモーリヤックが神の視点に立って小説を書いているからであると、厳しく批判したことは周知のとおりである。このサルトルの論文に対する反論が、モーリヤック自身によって、1947年、イギリスで『私の小説観』 *Ma conception du roman*<sup>(3)</sup> と題する講演でなされている。又、他の批評家によってもなされている。(例えばネリー・コルモー『フランソワ・モーリヤックの技法』 *L'Art de François Mauriac*, etc.)<sup>(4)</sup> いずれも主として物語技法に関してである。

サルトルの批判は、形而上学的次元と芸術的次元の双方にわたっていて、それぞれの次元で批判がなされているのみならず、双方が密接に関連したものとなっている。この点が、彼の批判の1つの特色となっている。このサルトルの批判は、少なくとも今日の物語論的な観点からは、殆ど取るに足りないものと見做されている。しかしながら、その批判を単なる物語技法に対する批判と見做すだけならば、批判の根拠となっているサルトルの思想的側面を見落とすこ

とになるであろう。本稿は、彼がモーリヤックの小説のどのような点を批判しているのか考察し、モーリヤックを何故、厳しく批判したのか、その理由を彼の実存主義思想と照らし合わせることによって明らかにしようとするものである。また、サルトルの指摘している物語技法が、ジェラール・ジュネットらの物語論を（部分的にはあるが）先取りしているにも拘らず、今日余り顧みられないのは何故かということにも触れる。

サルトルは、その論文の冒頭で（また結びの部分でも）彼の小説観を表明している。彼は、作中人物が自由であるべきであり（「作中人物を生かそうと願うなら、彼らを自由にしてやることだ」<sup>(5)</sup>）、小説家は、作中人物を「定義」したり、「説明」したりするのではなく、「予見できない情念と行為」<sup>(6)</sup>を提出すべきであると主張している。そのよい例として、彼は、ドストエフスキーやヘミングウェイやフォークナーの小説を挙げている。これらの作家の小説の作中人物がこれから何をしでかすか、作中人物自身も読者も知らない、彼らについて、すべてが言い尽くされてはいず、不透明な部分があり、それ故に読者は作中人物が次に何をするかを、その冒険の結末がどうなるかを、期待を込めて待つのである、また、このように作中人物の取る行動が、予め決定されても告げられてもいない、つまり彼らは自由だ、とサルトルは言う。そして、「もし主人公の未来の行動が前もって遺伝とか社会的影響とか、何かそうしたからくりで決定していると私が気付いたとしたら、私の時間は私の上へ逆行してしまう」<sup>(7)</sup>と言っている。作中人物の取るであろう行動や行く末が何らかの決定論に従って決められているのであれば、彼らには自由がないのであり、読者は、もはや彼らに興味も関心もなくなり、小説の世界から元の自分の世界へ戻ってしまう、という訳である。小説においては、作中人物が自由であり、「すべてがまだ別様に発展する可能性がある」<sup>(8)</sup>という気持ちを（読者に）持続させねばならないというのが、サルトルの小説観なのである。この小説観を軸にして、モーリヤックの小説を批判して行くのである。

サルトルの批判の特色は、彼が単に物語技法（芸術的次元の問題）のみを問うているだけではなく、まず、自由や運命の問題（形而上学的な次元の問題）

及びそれに伴う認識の問題を投げかけ、それらとモーリヤックの物語技法とを結び付けて論じている点にある。

サルトルがその論文でまず第一に、モーリヤックの小説の中に作中人物の自由が認められるかどうかという問題を提起をする。自由であることが人間の根源的な有り様だとする、彼の実存主義思想からすれば、このような問題設定は必ずしも恣意的だとは、言えないであろう。『夜の終わり』の序文で言っているように、モーリヤックは、「この上もなく重い運命というものを背負い込んだ人間に頒ち与えられているあの力——自分たちを押しひしぐ掟に向かって否というあの力<sup>(9)</sup>」を描こうとしている。この序文から、サルトルは、テレーズが自分の運命と戦う人間である、そしてそうであるからには彼女には一方には「小石か薪」でもあるかのように「自然」(la Nature)に包まれた部分があるが、他方には、彼女には「自由」(la liberté)があり、「自由」が「自然」を受け入れれば、「宿命」(la fatalité)の支配が始まり拒めばテレーズは自由になる、彼女には、「否という自由——或いは少なくとも、諾といわない自由」(liberté de dire non—ou tout au moins de ne pas dire oui)<sup>(10)</sup>があるのだと予測して見せている。そして、このような自由が、この小説の中に認められるかどうかを問うのである。

まず、サルトルは、モーリヤックが彼女の「性向」(penchants)が予め決定されていることのみを「運命」(le destin)と呼んでいるが、運命と性格を混同すべきでない、指摘することから始める。サルトルは、性格は、「我々の努力を知らないうちに常に同一の方向へ向けてしまう柔らかな力の総体」<sup>(11)</sup>であり、人間自身のものであって、運命という何か超自然的な力とは別のものであると言う。テレーズが、娘マリーの恋人の親友モンドゥーに咎められた時、逆に彼の論理の矛盾点をついてやり込めた場面で語り手が言っている言葉——「今度は話しているのは、確かに彼女であった。あらゆる痛烈な攻撃にも準備のできたテレーズであった」<sup>(12)</sup>——は、彼女の性格のことを言っているのだとサルトルは指摘する。そして、彼女のどの行為も人を不幸にしてしまうように働

いている力が運命であって、それは、彼女の意志とは別個の掟であると、指摘している。さらに、テレーズの運命は、一方で「性格上の欠点」から成り、他方で「彼女の行為に重くのしかかっている呪い」<sup>(13)</sup>から成っているのだ、と鋭く指摘する。そして、テレーズの性格上の欠点は、彼女自身によって「内部から確認され得る」が、呪いの方は、「或る証人によって外部からなされる無数の観察」<sup>(14)</sup>がなければ、認められないだろうと言う。彼によれば、小説家は、せいぜい作中人物の一人と同一化し、その人物の「共犯者」<sup>(15)</sup>(complice)となることは許されるがその場合は、その人物の「証人」(témoin)となることはできない。反対に、他の作中人物に対しては、証人になることしか許されず、外からしか、彼らを描けない。サルトルが、小説家が神の全知の視点を導入して人間の内部と外部の両方を描くことに反対しているのもそのためである。

こうしてサルトルは、モーリヤックの物語技法を浮き彫りにすることに、取りかかるのである。サルトルは、モーリヤックが(3人称で)作中人物の内面を描く時の3人称の代名詞の生じさせる効果を巧みに用いていることを指摘する。即ち「テレーズは、彼女が感じている気持ちを恥ずかしく思った。」(Thérèse eut honte de ce qu'elle éprouvait.)<sup>(16)</sup>という条りを読む時、読者は、テレーズの心中の恥ずかしさを知る、それは彼女自身が恥ずかしさを感じていると知るからである、読者はこうして彼女の心中にいると同時に、彼女の外から彼女の心中を眺めることができる、‘彼女’という3人称の代名詞が、他人、即ち外からしか見えない人を指し示すから、外から眺めているという錯覚を与えるのであると、皮肉をこめてサルトルは鋭く指摘している。しかしながら、3人称で作中人物の内面を語る時に生じる、このような効果は、他の多くの小説家の作品にも見られるものである。読者が作中人物の心中を知り、その作中人物と共に生きると同時に、その作中人物を眺めるという(読者の)特権は、現代の、ジェラルド・ジュネットらの物語論でも、肯定的なものとして受けとめられているものである。

次に、サルトルは、モーリヤックが、テレーズその他の作中人物の内面に頻繁に出入りし、作中人物の心中を描いているかと思うと、突然、冷たくその人

物を突き放してしまうと、その容赦のなさも非難している。「彼女は自分の嘘を意識せざるをえなかった。しかし、彼女は嘘に安住し、平然としていた」という語りの後半の文を指して、テレーズの態度を暴く、その暴き方に作者の冷酷な批判がある、とサルトルは非難している。) 又、作者が作中人物の視点に立って、その人物の見ていることや彼女の心中を語るのであれば、読者はその人物の知っていることしか知り得ないはずなのに、(作者が) その作中人物の意識していないことや知らないことをも語っているのは不自然であると批判している。「用心深い絶望の女」etc. というように判決を下しているのはテレーズではなく、モーリヤックであるとサルトルは指摘している。) さらに作者が、主人公を離れて、突然、別の作中人物の意識の真ん真ん中に居座る、また、そうかと思うと、うんざりして突然その人物からも手を引き、その人物のことを嘆くなどして、自分の創造したものに思いを馳せていると指摘している。作者が物語の世界に顔を出しすぎていることを批判しているのである。サルトルにとっては、作者の小説の世界への現前が、邪魔なのである。モーリヤックの小説の、こうした点をサルトルは「おかしな点」(les bizarreries) だとし、それは、モーリヤックが神の持つ全知の視点に立って書いているからだとして指摘する。

[...] toutes les bizarreries de sa technique s'expliquent par ce qu'il prend le point de vue de Dieu sur ses personnages : Dieu voit le dedans et le dehors, le fond des âmes et les corps, tout l'univers a la fois, De la même façon, M. Mauriac a l'omniscience pour tout ce qui touche à son petit monde <sup>(18)</sup> [...].

彼の技巧のおかしな点はすべて、彼がその作中人物を神の視点から見ているということから説明される。即ち、神は内部も外部も、魂の奥底も肉体も、全宇宙を同時に眺める。これと同じやり方で、モーリヤック氏は彼の小世界に関係のあるすべてのものについて、何でも知っている。

モーリヤックが、主人公を早く理解してもらいたいとあせるあまり、「用心

深い絶望の女」とか「悪臭を放つ女」などと、決定的な評価を下してしまっていることに対して、サルトルは、小説家は作中人物の行動を提供すべきであり（神の視点を小説に持ち込むことによって）絶対的な現実を持ち込んだり、決定的な評価を作中人物に対して下すべきでないとは反対する。モーリヤックはテレーズを「永遠の姿の下に」(sub specie aeternitatis)<sup>(19)</sup> 見ることによって彼女を「物」(une chose)<sup>(20)</sup> にしてしまっている、作中人物が自由な意識を持つ人間として提示されなければ、「物」に変形してしまう、とサルトルは批判している。つまるところ、作中人物から自由な意識を奪ってしまっているのは、モーリヤックが神の視点に立って作中人物を見ていることに起因していると言っているのである。

ここで、サルトルは自由の問題に立ち戻り、テレーズの自由がどのようなものか考察する。そして、彼女に自由が全く与えられていないのではないが、それは限定された自由でしかなく、(彼の言葉によれば)「真の自由」<sup>(21)</sup> ではないと指摘する。テレーズは、一人娘マリーの結婚が実現するようにと、自分が親から受け継いだ財産を、いわば持参金として与えることを決意する。その翌日に自分の決意を振り返っているテレーズの心の動きに、サルトルは、彼女の自由とはどういうものか読み取る。

«Mais hier surtout, lorsque j'ai décidé l'abandon de ma fortune, ce fut une profonde jouissance. Je planais à mille coudées au-dessus de *mon être véritable*. Je grimpe, je grimpe, je grimpe... et puis je glisse d'un seul coup et me retrouve dans cette volonté mauvaise et glacée : mon être même lorsque je ne tente aucun effort—*ce sur quoi je retombe quand je*<sup>(22)</sup>  
*retombe sur moi-même.*»

「けれど特に昨日、私は財産の放棄を決意した。それは深い喜びだった。私は私の本当の存在より高いところを飛んでいた。私はよじ登る、どんどんよじ登る…と次に私は一挙に滑り落ち、この邪悪で冷淡な意志のなかに再び陥っている。それは、私が何の努力もしない時の私の存在そのもの、

私自身を省みる時に私が立ち戻るところのものなのだ。」(強調：サルトル)

サルトルは、テレーズには既に「本当の存在」が与えられていて、彼女の自由は、彼女の「本当の存在」(「邪悪で冷淡な意志」の持ち主たる自分)から逃れることでしかない、この自由は彼女の「本当の存在」つまり「本性」(la nature)<sup>(23)</sup>の上に付け加えられたものでしかなく、彼女の本性をつくるものではない(「意識と同様、自由もまた、テレーズの本当の存在を構成しないのだ」)<sup>(24)</sup>と指摘する。そして、彼は、「モーリヤックにとって、人間というものは自分の自由でもって自分自身を創造することも、自分の物語をつくることもできないのだ」<sup>(25)</sup>と批判するのである。

サルトルがこのように批判するのは、自由であることが人間の実存の根本的な有り様だとし、人間は自由に自らをつくるものであるという主張——これは彼の実存主義思想の中核をなすものである——を持つからである。『実存主義はヒューマニズムである』*L'Existentialisme est un humanisme*<sup>(26)</sup>の中でサルトルは、彼の代表する実存主義について以下のように述べている。

実存主義は、人間は作られた物体とは異なり、「実存が本質に先立つ」<sup>(27)</sup>(*L'existence précède l'essence*)と考える。例えば、ペーパー・ナイフは、その本質つまりその製造法や性質の全体は、それが作られる以前からどのようなか定まっている、即ち本質が実存に先立っている。が、実存主義(より厳密には無神論的実存主義)は、例え神が存在しなくても、何らかの概念によって定義される以前に実存するものが少なくとも1つあり、それは人間或いは人間的現実であると考え。そして、人間は作られた物体とは異なり、前もってその本性や用途や目的——一言で言えば本質——を与えられているのではない、つまり人間の本質が先に存在しているのではない。何故なら、人間の本質を考えるものである神が存在しないからである。人間は、まず先に生きることによって「自らつくるところのもの」「自ら考えるところのもの」<sup>(28)</sup>になるのである。

こうして、サルトルは、「人間は、自ら作るところのもの以外の何ものでもない」(L'homme n'est rien d'autre ce qu'il se fait)<sup>(29)</sup>というのが、実存主義の第一原理であると明言するのである。また、自由とは「自己自身の諸可能性を自ら創造する1つの選択より以外の何ものでもない」(『存在と無』*L'être et le néant*, p. 654)<sup>(30)</sup>と言っている。彼の実存主義は、人間を物体視することを拒否する理論であり、何らかの決定論的、唯物論的な観点から人間を説明することを拒否する。例えば、ゾラのように、人間が遺伝と環境によって決定されていることを示そうとすることを拒否するのである。<sup>(31)</sup>

サルトルが、人間の自由というものに注目してモーリヤックの小説を論じるのは、彼が以上のような思想を持つからである。サルトルにとって、自由とは自らを作る自由を意味している。従って、既に見たように、テレーズが初めから「本当の存在」を与えられているのであれば、彼女には、自己自身を作る自由、真の自由は無いということになるのである。サルトルがモーリヤックを避難しているのは、正しく、この点なのである。

最後に、サルトルは、自由の問題に、時間のそれを結びつける。テレーズが彼女の「本当の存在」から逃れようとしても、「私はどんどんよじ登る…が一挙に滑り落ちてしまう」というように、常に落ちることが前もって決められているため、彼女は、壁をよじ登っては落ちる虫けらと同じで、自由と呼べるものは無いのであり、未来が過去のようにくりひろげられ、過去を繰り返すだけならば、それは死んだ時間である、こうして自由も時間も押し殺されてしまう、というのである。そして、彼は、「自由な意識と時間で小説を作ることが真実なら『夜の終わり』は小説ではない」「モーリヤック氏は小説家ではない」と、その論文を締め括っている。<sup>(32)</sup>

では、このようなサルトルの批判を、モーリヤック自身は、どのように受け止めたのか。それは、彼自身の行った『私の小説観』*Ma conception du roman*と題する講演で明らかにされている。(彼は、既に古いものとなったサルトルの



批判を、サルトル自身がもはや重視していないにも拘らず、サルトルの信奉者たちが依然として重視し続けているため、自分の小説観を述べるのだと断っている。)

モーリヤックは、まず、よい小説を書くための一般的な規則は無い、小説家は自分に対してしか、また自分が書くように要請されている世界に対してしか価値の無い規則、自分自身に固有の規則しか無いと言っている。また、フォークナーやドス・パソスらの小説が自己分析も自己認識も余りしない本能的で強烈な動物性を持つ作中人物の日常の行動と言葉を描くことによってその作中人物がどのような人間か（読者に）知らしめているのは、素晴らしい技法であるが、それはそういう人物を描くのに相応しい方法であり、フランス人のような、人間は自己自身を認識し且つ自己認識をしなければならないと信じている人物を描くには、自己自身の情念に常に注意深い人間の心の認識のために適用された技法が適しているのであって、そのような技法をフォークナーやドス・パソスらの名のもとに避難するのは不条理である（＝ばかげている）と、モーリヤックは言っている。フォークナーやドス・パソスの小説の作中人物やフランス人をこのようにパターン化してしまうことには疑問が残るであろう。サルトルの批判に、確かにフォークナーの名が出てくるが、彼が、批判しているのは、特にドストエフスキーやヘミングウェイの名のもとにである。（ドス・パソスの名は『モーリヤック氏と自由』には見られない。この評論が収められている *Situation, I* の中にドス・パソス論も収められていて、それを『モーリヤック氏と自由』の中に出ているものと錯覚したのである。<sup>(33)</sup>）いずれにせよ、（作中人物の運命を決めつけてしまっているという批判に対しては）モーリヤックは、自分が作中人物の運命を描いていることを認めていて、運命という認識し難い曖昧な部分を観察し判断する権利を、フランスの小説家は皆、自らに認めていると弁護している。彼は、実際、既に『小説論』 *Le Roman*<sup>(34)</sup> で、小説家は神の模倣者であり、「人間を創造し運命を工夫し、それらに事件や災難を折り込み終局へと導くのである」<sup>(35)</sup> と述べ、『小説家と作中人物』 *Le Romancier et ses personnages*<sup>(36)</sup> においても、小説家が、物語の世界で神のように全知全能であること

を認めている。モーリヤックは、逆に、サルトルが、神のみが人間の「心の奥底」(les reins et les cœur<sup>(37)</sup>)を探る権利を持つという聖書の言葉を小説の世界にまで広げていると批判している。小説家が物語に介入して作中人物がどういう人間であるかを、全知全能の神のように断定するかしないかということは、小説家が、性格や運命を描き説明しようか否かに応じて、自由に決めればよい、というのがモーリヤックの主張なのである。このように、語りの視点の問題に関しては、サルトルとモーリヤックとでは、全く異なった立場をとっていて、モーリヤックは一步も譲ろうとはしていないが、彼の『全集』*Œuvres Complètes* 第2巻の序文では、「ジャン-ポール・サルトルが、私をひどく打ちひしぐために正にこの本を選んだのは偶然ではない。この本の中で、私は、すべてが既に言い尽くされてしまった私の被造物の一人の幻惑に負けてしまっている<sup>(38)</sup>」と、サルトルの批判を暗に認めている。そしてサルトルが批判した(『夜の終わり』の)初版の序文を、『全集』では省いている。

サルトルの主張する物語技法に対する反論は、ネリー・コルモーも行っている。全知の視点から作中人物の内も外も描くのみならず、物語世界への介入が見られるのは、一人モーリヤックだけではなく、多くの古典小説に見られることであるとし、バルザック、スタンダール、フロベールらの具体例を挙げて反論<sup>(39)</sup>している。

物語技法についてのサルトルの主張が、少なくとも今日では取るに足りないものとされているのは、全知の視点に立って書かれ、しかも作者(より厳密には語り手)の介入が明らかに見られる小説では、サルトルの言うように、作中人物の自由が見られないかということ、必ずしもそうではないからである。このことは、例えば『赤と黒』や『パルムの僧院』が示している。我々読者はジュリアン・ソレルやファブリスの運命がどうなるのか、語り手がその大筋を予感させはするが、彼らが、遭遇する出来事を前にして、どういう行動をとるか、また、どういう苦境に立たされるか、それをどう解決するに至るかということは、前もって分からないのである。サルトル流に言えば、彼らは自由な意識を

持って行動しているのである。このようなことは、ラファイエット夫人からバルザックらに至るまで、多くの古典小説についても当てはまるのである。‘作者の遍在性’は、決して珍しいことではないのである。<sup>(40)</sup>

語り手が神の視点のような特権的な視点から、作中人物の外面だけでなく心中をも語り、さらにその人物の意識していないことをも（読者に）明らかにするという技法は、特に心理小説には欠かせないものである。そうした技法のお陰で、読者は、作中人物の心中を知り、その作中人物と共に生きながらも、第三者の立場から、その人物の行動や行く末を見守るといふ、醍醐味を享受することとなるのである。それ故、そうした技法をサルトルのように否定的に捉えることは小説の持つ醍醐味を否定することになるのである。今日の物語論の観点からサルトルの批判が取るに足りないとされるのも、そのためであろう。

では、自由の問題から始まって、全知の視点から描くという伝統的な技法をサルトルが否定することに至ったことに、何の意味もなかったのかと言うと、必ずしもそうではないのである。モーリヤックの小説の主人公には、制限された自由、何らかの拘束からの自由しか無いという批判に対しては、逆に、制限された自由、間歇的な自由の方がより人間的でより現実的だ、それに、全的に自由な人間を描かねばならないというような法は何処にも無いと反論することも確かにできるであろう。<sup>(41)</sup> また、実存主義が絶対的自由の哲学であり、サルトルの言う自由は、ファシズムの脅威に対する抵抗のために創りあげた自由の幻影でしかない<sup>(42)</sup>と批判することもできよう。

しかしながら、サルトルが飽くまで、新たな人間の有り様に対する認識——「我々は選択する1つの自由であるが、自由を選ぶのではない、我々は自由であるべく宣告されている、[...] 自由の中に投げこまれている [...]」（『存在と無』p. 541）という認識——の上にたって、モーリヤックを批判していることを思い起こす必要があるであろう。彼の自由の概念は、分化されておらず、抽象的であると批判することもできようが、人間が全的に自由である<sup>(43)</sup>というのは、理想というより、むしろ新たな現実、新たな人間の有り様に対する認識であること

を思えば、『モーリヤック氏と自由』は、そうした新たな人間の有り様に対する認識の欠如に対する批判であるということが理解されよう。

神の全知の視点から語り、作中人物を、絶対的な評価としてあれこれと断定することに対する批判は、既成の一定の価値や道徳に従って人間を裁定することに対する批判であり、新たな世界——既成の価値や道徳の崩壊した世界、神のいない世界——の中で生きる新たな人間の有り様を描くには、伝統的な技法とは別な新しい技法が必要であるということの主張であると考えられるのである。では、小説家でもあるサルトル自身は、実際、どのような小説をどのように書いているのか。このことについては、別に考察することとしたい。

#### 註

- (1) Jean-Paul Sartre, *M. François Mauriac et la liberté*, in *Situation, I*, Gallimard, Paris, 1947.
- (2) François Mauriac, *La Fin de la nuit*, in *Œuvres romanesques et théâtrales complètes, tome III*, Gallimard, Paris, 1981. 初版は1935年, Bernard Grasset から出版された。
- (3) François Mauriac, *Ma conception du roman*, in *Paroles perdues et retrouvées*, Bernard Grasset, Paris, 1981, pp. 63-74. この講演は, 1947年5月27日にオクスフォードでなされ, 次いで同年5月30日にエジンバラでなされた。
- (4) Nerry Cormeau, *L'Art de François Mauriac*, Bernard Grasset, Paris, 1951. コルモーは, この中でモーリヤックの物語技法を分析し, 付録の *D'Une opinion de M. Sartre* でサルトルの批判に反論している。
- (5) J.-P. Sartre, op. cit., p. 34.
- (6) Idem.
- (7) Idem.
- (8) Ibid., p. 51
- (9) Ibid., p. 35. サルトルの引用。(F. Mauriac, *La Fin de la nuit*, op. cit p. 1012.)
- (10) Ibid., p. 35.
- (11) Ibid., p. 36.
- (12) Ibid., p. 36. サルトルの引用。(F. Mauriac, *La Fin de la nuit*, p. 171.)
- (13) Ibid., p. 37.
- (14) Idem.
- (15) Ibid., p. 44.

- (16) Ibid., p. 39. サルトルの引用。(F. Mauriac, *La Fin de la nuit*, p. 79.)  
 (17) Ibid., p. 40.  
 (18) Ibid., p. 42.  
 (19) Ibid., p. 43.  
 (20) Idem.  
 (21) Ibid., p. 46.  
 (22) Ibid., pp. 44-45. サルトルの引用。(F. Mauriac, *La Fin de la nuit*, p. 124.)  
 (23) Ibid., p. 45.  
 (24) Idem.  
 (25) Idem.  
 (26) J.-P. Satre, *L'Existentialisme est un humanisme*, Nagel, Paris, 1970. これは、1945年にサルトルがパリで行った講演を活字にしたものである。

サルトルは、この中で、人間は自ら自由な意志に基づいて行動を選択し生きればよいと言っている。それ故、実存主義は、何ら具体的な行動方針を人に与えようとはしていないのであり、ニヒリズムと紙一重のところにあると言えよう。しかし、人間は他から律せられて生きるのではなく、主体的に生きるべきであるとしている。何よりも人間の自由と主体性を重視しているのである。ところで、人間一人一人が、自ら生きることによって人間の本質を見出すとすれば、それぞれ異なった本質が存在することになるのではないか、そうすれば、それはもはや本質とは言えないのではないか、という疑問が生じるかも知れない。このような疑問をサルトルは予期しているかのように、「各人は、自らを選ぶことによって、全人類を選択するのである」と言っている。彼は、各自が自らかくあろうと考える人間になることによって、同時に、人間というものは、かくあるべきだという、いわば普遍的な人間像をつくっているのだと考えているのである。それ故、各自は全人類を「アンガジェ」(engager)することになるというのである：「個人的行為は全人類をアンガジェする。」(その結果、当然のこととして、各自が異なった人間像を選ぶこととなる可能性があるのだが、この点に関して、サルトルが特に何も言っていないことからすると、それは二次的なことだと見做しているからだと思われる。)個人と全体或いは個と普遍性をこのように結び付けるサルトルの考え方は、人間の主体性を重視し、人間は世界(人間をも含めて)に意味を与える中心であるという、デカルト以来の、近代の主体中心主義(或いは個人中心主義)思想と通底している。(Cf. 今村仁司『現代思想の基礎理論』講談社、1992年、講談社、pp. 27-33。)

- (27) Ibid., p. 17.  
 (28) Ibid., p. 22.

- (29) Idem.
- (30) J.-P. Sartre, *L'être et le néant, Essai d'ontologie phénoménologique*, Gllimard, Paris, 1981. 初版は1943年。
- (31) Ibid., p. 59.
- (32) J.-P. Sartre, *M. François Mauriac et la liberté*, p. 52.
- (33) J.-P. Sartre, *A Propos de John Dos Passos et de «1919»*, in *Situation, I*, pp. 14-24.
- (34) F. Mauriac, *Le Roman*, in *Œuvres Complètes, tome III*, Artème Fayard, Paris, 1950, pp. 263-284. *Le Roman* の初版は, 1928年に Artisan du Livre から出版されてる。
- (35) Ibid., p. 263.
- (36) F. Mauriac, *Le Romancier et ses personnages*, in *Œuvres Complètes, tome III*, pp. 287-328. 初版は, 1933年に R.-A. Correa から出版されている。
- (37) F. Mauriac, *Ma Conception du roman*, p. 67.
- (38) F. Mauriac, *Œuvres Complètes, tome II*, p. IV.
- (39) N. Cormeau, *D'Une opinion de M. Sartre*, pp. 376-378.
- (40) Ibid., p. 368.
- (41) Cf. Ibid. , p. 367.
- (42) G. ルカーチ『實存主義かマルクス主義化か』城塚登・生松敬三訳, 岩波書店, 1977年, pp. 70-71。
- (43) Ibid., p. 71.